

バイロンの Turkish tales と プーシキンの Южные Поэмы

前 島 正 安

前 章

1

ロシアの文学界にイギリスのロマン主義文学の一端が紹介されたのは、1811年、カチェノフスキイが主宰する雑誌《Вестник Европы》で、W. Scott の作品 *The Lay of the Last Minstrel*, *Marmion*, *The Lady of the Lake* の名を挙げて、この作家はイギリスで最も愛読される人であると伝え、またそれらの作品の発行部数まで報道している⁽¹⁾。

1915年、カラムジン派作家イズマイロフが発行する雑誌《Российский музей》に『ロンドン便り』という記事が載り、その文中に「W. Scott とバイロンのふたりは印刷所に休みを与えぬほどの人気作家で、日ごとに名声を増している」と伝えている。バイロンの名がロシアの印刷物に初めて現われたのはこのときと想定されている。また同誌には、バイロンの *Corsair* (海賊) を扱った論文のロシア語訳が載っている。出版物でバイロン関係の記事が出たのはこの年をもって始めとされている⁽²⁾ *Corsair* がその前年4月に出版されているので、当時としては素早い反応と考えるとよからうか。

1816年、《Русский инвалид》誌に『最近イギリス文学概観』として、イギリスの諸雑誌からの記事を整理してコメントを与えたものが半年に亘って掲載され、そのうちで、スコットは詩壇の第一人者たる榮譽を欣然としてバイロンに譲った、との当時、世人の関心をひいた事実を伝えてい

る。

1818年、《Сын отечества》にはスコットの *Rob Roy* の内容が紹介されている。

ロシア貴族が習熟・使用する外国語は殆んど絶体的にフランス語が優位を占めていた。のちに、プーシキンを温かく迎え容れてくれたラエフスキイ将軍家の人びとは英語に慣れていたし、ノヴォロシヤ総督のミハイル・ヴォロンツォフはプーシキン迫害に立ち廻った人ながらも、イギリス通であったことはむしろ例外的現象であった。貴族の子弟はフランス語を通じて政治・法律・哲学・文学の文献を読んだ。ロシアとフランスの間の文学的關係は非常に濃厚であった。そのため、フランス国内で愛好される文学作品は直ちにロシア人の間に伝播される。フランス革命の後になっても古典主義の伝統が根強く残っているため、他国の作品を受容する範囲も幾分とも狭くなる傾向があったろうが、イギリスのローマン主義作品の選択においても、Coleridge と Wordsworth の合作の *Lyrical Ballads* (1789) や Southey のものが注目の対象となった様子は、少なくともロシア語文献においては見当らぬ⁽³⁾。

フランスにあっては、1817—18年とその後に、スコットの人気が高まり、それがロシアにも及んでその翻訳が20年代に数多く出たが、翻訳は原文からではなくてフランス語訳からの重訳であった。そして、スコットがロシアの読書人の間にひろがった理由はいろいろあるだろうが、まず、後に皇帝となったニコライ大公がスコットとエヂンバラで面識があり、大公夫妻はスコットの作品を読んで夜を過ごしたこと、カラムジンやヴィヤーゼムスキイのような人も「スコットランド最後の吟遊詩人」の作としてこれを尊重したのみか、因陋派と目されたブルガーリンのような文学者もこれを文句なく推賞したなどが重なって翻訳も年々に数を増していった。

スコット作 *Ivanhoe* の翻案が《Вестник Европы》誌に《Ивангое》として連載された(1819)のが最初であって、その後の30年代に至っても新しい翻訳が続々と出されている。

ところが、バイロンに関する紹介・翻案・翻訳に至っては、暁天の星の

ようにその数も寥寥たるもので、さきに挙げた1815年と16年のバイロン紹介に次いで、19年に《Соревнователь просвещения и благотворения》誌に『バイロンとスコット』、20年には《Благонамеренный》誌に『放浪の人—Harold の出国』なる一文が載るだけで、しかもこれもスコットと並列して論ぜられているだけである。

スコットが出版物に賑わしく論ぜられたのに対し、バイロンがあまり登場しないのは、スコットはバイロンより17才の年長者であり、*The Lady of the Lake* (1810) で文名を確立してからは作家・州副知事として社会的地位も高かったのに対し、バイロンは *Childe Harold, I, II* (1812) の出版で一夜にして世を知られるようになり、‘I awoke one morning and found myself famous’ と、いかにもバイロン流のポーズをとった述懐を吐いて一躍ロンドン社交界の寵児となったにしても、バイロンの作品が上流社会の偽善に対する痛罵・皮肉が極度に鋭く、作品に漂う唯我的主張も巨大・怪奇であるため支配階級にとってのバイロンは好ましからざる存在であったことは当然明らかなこと、その故にロシアにおいても同じく体制側にとって、バイロンよりもスコットが優先的に好遇されたのであろう。

しかし、バイロンの作品が印刷の形で現れることの稀少であったことは、ロシアにおいてバイロン熱が低かったことにはならぬ。当時（1910—15年頃）の文学界の雰囲気をもベリンスキイ（1811—48）は、むしろ、同時代人としてこれを眺めたものではなく、後人が回顧したものとして、「プーシキン論」第5章（1844）で、バイロンが受容された様子を次のように述べている。

С 1813 года начали проникать в русские журналы темные слухи о каком-то романтизме. В «Духе журналов» даже была переведена грозная статья против Августа Шлегеля, в защиту классического французского театра. Вместе с романтизмом стали вкрадываться в наши журналы слухи о каком-то великом английском поэте г-не Бироне, Байроне или Байроне.⁽⁴⁾ (下線は筆者)

1813年からロシアの諸雑誌に、ロマンチズムとかいう曖昧な噂がはいるこむよりにきった。《Дух журналов》誌には、オーガスト・シュレーゲルに反駁して、フランス古典主義演劇を擁護した威嚇的な論文の翻訳まで出るに至った。ロマンチズムと共に、Бирон 氏とか Бейрон 氏とか Байрон 氏とかいう偉大なイギリス詩人の噂がわが国の雑誌に紛れこむようになった。

バイロンは1812年、*Childe Harold's Pilgrimage* で名声を博し、13年6月に *The Giaour* を、12月に *Bride of Abydos* を、あくる14年2月に *The Corsair* を、8月に *Lara* を出版したように、この時期には旺盛な創作活動に入っている。それ故、バイロンの名がロシアの読書人に知られ始めた時期は正しくもベリンスキイが述べている通りであるし、また Byron なる人の表記法も3種類あって確定していなかったのも尤もである。それにしても、この文からは、темные слухи, вкрадываться, о каком-то なる表現に見られるように、イギリス詩人に対する漠然たる警戒的気分がロシア国土にもそのまま伝承されたようでもある。なお、蛇足ながら文中の August Schlegel (1767—1845) はその機関誌「アテネウム」でロマン主義理論を推進した人である。

Schlegel の論文にまで神経をとがらせた保守派文学者の健在を物語っているが、これは、カラムジンの文語改革に反対して教会スラヴ語を尊重し、外来語の摂取をはねつけて、1811年に「ロシア語愛好者談話会」を創立し、それに依拠する人びとの意見を代表している。

アレクサンドル一世は治政の当初には英明君主の擬制を示したので、気鋭の若い貴族が、1801年に「文学・科学・芸術の愛好者の自由なる会」を設立していた。また、文語と口語の近接を図ったカラムジンの姿勢を継承した人びとによって、1815年 Арзамасское братство 「アルザマス会」が結成されている。会員はジュコフスキイ、バーチュシコフ、ヴィヤーゼムスキイである。プーシキンはリツェイを17年5月に卒業し、6月に外務院に採用されたが、勤務(10等官、年俸700ルーブル)といっても、母方の領地ミハエロフスコエ村への二カ月の賜暇帰省するのを妨げるものでは

なかった。そしてその年の秋にアルザマス会に正式に入会した。会員にはそれぞれ綽名が与えられる規定があって、彼は сверчок という名を頂戴した。сверчок とはコオロギであり、先輩ジュコフスキイは、こんな詩をもってプーシキンを迎えている。

С треском пыхнул огонек,
Крикнул жалобно Сверчок,
Вестник полуночи.

なぜプーシキンがコオロギか。ペテルブルグから少し離れたところのリツェイ校の壁の間にかくれて、そこから、うるわしい詩で既に、たからかにひびく声をあげていた——というのが Ф. Ф. Вигель なる文学同人の解説である⁽⁵⁾。

2

アルザマス会員は互いに相手を褒めたり、からかったりする詩を書き、あるいは敵陣営の詩人を材料に取り入れて同志間で共通認識を確めたりした。贈られた側は、これを一個の私信として私蔵するのではなくて、それを他の同人に示したりした。《Послание》と称する文学形式であった⁽⁶⁾。プーシキンはリツェイ存学中、1815年の1月、公開進級試験の席で《皇帝村の思い出》を朗読して、詩壇の最長老者デルジャーヴィンから抱擁を求められてからは一挙に将来ある詩人として注目された。しかし、奔放直情な天性の詩人は学校生活の規定を忠実に守ることはできない。また、守るつもりをなくしていくのはやむを得ないことだった。卒業が間近かになる頃には、外出禁止令の緩和に伴なって、祭日以外の平日にも校舎を脱け出して、喫茶店に入り浸ったり、青年士官と夜遊びに耽ったりして生活は次第に荒れていった。彼は悪遊びだけに終始した訳ではなく、多くの先人から学びとろうとして盛んに訪問をした。そして、その感懐を書幹体形式の послание として発表した。詩人の真情を飾りなく歌いあげて、「若いときにまじめづらすものも笑止の至り。老人のくせにそわそわするものも

笑止千万。すべてのものには順序がまわってくる」などと青春を讃え、
「俗人ばらが嫉妬の眩きをしても軽侮するだけだ」と続き、最後には――

Она не ведает, что дружно можно жить
С Киферой, с портиком, и с книгой, и с бокалом;
Что ум высокий можно скрыть
Безумной шалости под легким покрывалом.

《K Каверину》, (1816) の最終行から

она（俗衆ばら）には分っていないのだ。女神アプロディーチの住み給うキューテラ島と古代神殿の柱廊玄関と、また書籍と酒盃とが仲よくやっつけていけることが。また、むこう見ずないたずらという軽るやかなヴェールを冠って、高邁な知性を隠し得ることも――

と、青年特有の情熱謳歌を巧みな綺語をつらねて読者をおもしろがらせたりしている。

また、カラムジン邸を訪問するうちに、青年将校チャアダーエフ（1794—1856）の識見に感心し、このロシアの後進性を克服するためには農奴制を廃止し、市民生活に西欧のような自由を確立せねばならぬという信条に同意したのであろうか、詩人は彼に послание を寄せて――（前部を省略して引用）

Мы ждем с томленьем упованья
Минуты вольности святой,
Как ждет любовник молодой
Минуты верного свиданья.

(1817)

若い恋人が確実に会える瞬間を待つように、聖なる自由の到来の瞬間を、夢中に焦がれて疲れ果てても、わたしたちは待ち続ける。――そして、

Товарищ, верь: взойдет она,
Звезда пленительного счастья,
Россия вспрянет ото сна,

И на обломках самовластья
 Напишут наши имена!

ロシアは長夜の惰眠から覚めて、専制政治の廃墟の上にわたしたちの名が書かれるだろう——と、自信と誇りをもって昂然と結んでいる。

恋を歌い、森の散策を詠じ、「談話会」の敵手を揶揄しているうちはプーシキンの身は安全であった。ところが、《Вольность》の激越な政治詩が青年貴族の間にひそかに筆写され愛読されるに及んで、詩人は皇帝に大胆な挑戦を試みたような立場に自らを置いたこととなり、官憲は彼の生活に目を注ぐようになった。

さて、アルザマス会員のうちにはバイロンに興味を懐きはじめて人がふたり現れた。そのひとりにはプーシキンの終生の友であるヴァーゼムスキイ公爵である。彼はワルシャワにあったとき、ポーランド人の通訳が、バイロンの *Harold IV* (1818) をフランス語に翻案したものを示された。公爵はこれをロシア語に訳して、会員のひとりである A. И. ツォルゲーネフに宛てて、1819年10月11日付の手紙のなかで伝えている⁽⁶⁾。

いまひとりはイタリアにあったバーチュシコフである。彼もツォルゲーネフに宛てた手紙のなかで「イタリア人はバイロンの劇詩を翻訳して、貪るようにして読んでいるが、おなじことがわが国でも起ろうとしている」⁽⁷⁾と伝え、ツォルゲーネフは、それを И. И. Дмитриев 伝えている。そうした経緯もあって、ロシアの文学者なかまには、バイロンとイタリアとバーチュシコフがひとつのイメージとして重なるようになった。バーチュシコフも *Harold* の断片を露訳している。

親密な関係にあって、よく顔を合わせたマルザマス会員の接触を考えてみると、プーシキンもバイロンの *Harold* の一部を開いたと見做してよいのではなかろうか。あるいは、*Corsair* (ロシア語で《Корсар》『海賊』) の前半を1819年に知ったであろうと推定したブラゴイの説を引用する学者もいる⁽⁸⁾。ただ知っていたとしても、そのときの詩人はバイロンにはあまり深い関心をもたなかったが、南方追放の身となって、はじめて大きな関心をいだき始めたという。

筆者はここに、イギリスの詩人の詩篇の出版年次を列記したい。プーシキンとの関係を言及するとき、いちいち彼我の創作年を記入するのは煩わしさを免れたく思う。作品の頭に①…⑤と数字を丸く囲ったものは、バイロンがこれらを *Turkish tales* と命名したものの出版の順序を示す。合計5篇になるが、そのほかに *Parisina* の舞台はイタリアの貴族 Ferrara 家に起った悲劇から取材しているので前5作に続いて東地中海のことであることには変りがないので、この6篇を総称して *Eastern tales* という学者⁹⁾があるので、*Parisina* を⑥として記入した。

バイロン作品の出版年次

Childe Harold's Pilgrimage I, II,	(1812・3・10)
① The Giaour	(1813・6・5)
② The Bride of Abydos	(1813・12・2)
③ The Corsair	(1814・2・1)
④ Lara	(1814・8・6)
Hebrew Merodies	(1815・4)
⑤ The Siege of Corinth	(1816・2・7)
⑥ Parisina	(1816・2・7)
Childe Harold's Pilgrimage III	(1816・11・18)
The Prisoner of Dhillon and Other Poems	(1816・2・5)
Manfred	(1817・6・16)
Beppo	(1818・12・26)
Childe Harold's Pilgrimage IV	(1818・4・28)
Mazeppa & Ode on Venice	(1819・6・28)
Don Juan I, II(匿名で)	(1819・7・15)
Marino Faliero & The Prophecy of Dante	(1821・4・21)
Don Juan III, IV, V	(1821・8・8)
Cain, Sardanapalus, The Two Foscari	(1821・12・19)
The Vision of Judgement を The Liberal 誌に	(1822・10・15)
Werner	(1822・10・23)
Heaven and Earth を The Liberal 誌に	(1823・1・1)
The Age of Bronze (匿名で)	(1823・4・1)
The Island	(1823・6・23)
Don Juan VI, VII, VIII with Preface	(1823・7・15)
Don Juan IX, X, XI	(1823・8・29)
Don Juan XII, XIII, XIV	(1823・12・17)
The Deformed Transformed	(1824・2・10)

Don Juan XV, XVI, (1824・3・26)
4月18日病死。

②は一ヶ月以内に 6,000部, ③は発売日に 10,000部が売切れとなる。

プーシキンの劇詩の執筆 (発行ではない)
年次 (южные поэмы だけ)

Кавказский пленник	(1820—21)
Братья разбойники	(1821—22)
Бахчисарайский фонтан	(1821, 22, 23)
Цыганы	(1824)

プーシキンの同時代人によるバイロン作品の翻訳
(その出版年次は筆者に不明)

Дон Жуан — Н. И. Гнедич	(1784—1833)
The Prisoner of Chillon — Шильонский узник — В. А. Жуковский	(1783—1852)
The Bride of Abydos — Абидовская невеста — И. И. Козлов	(1779—1840)

3

プーシキンの首都生活は1820年の4月中旬に早くも終止符を打たれる。皇帝は詩人の家宅の搜索と身柄逮捕を命じた。街中に噂が突っ走った。シベリア追放らしい、いや、北緯65°のあの孤島に幽閉されるらしい、との風説もまちまち。その報に衝撃を受けたジュコフスキーなどの多数の先輩の奔走のお蔭もあって、刑の軽減を受けて、ペテルブルグを隔つる1500キロの南方なる Екатеринбург へ特使として派遣され、その地で殖民地指導長官をしている Инзов 将軍に対して、新任地への転任を命ずる勅旨を伝えるというのが詩人に課せられた使命であった。

シベリア行きかもしれぬと色を失った詩人にはむしろ意外な、寛大な処置であったし、長官として臨む将軍が、詩人の過誤を若者の陥りがちな客気の致すところと見て、温かい目で見守ってくれることなどがあって、詩人は帝制の絶体主義の峻厳さを甘く考える点もあったらしい。

この地で熱病を患った彼は下宿で呻吟していた。対岸のドネープル川で

水遊びをして風邪をひいて高熱に苦しんでいたところをラエフスキー将軍が次男ニコライ、三女、四女の令嬢、医師、英人家庭教師 Miss Mattenらの一行が見舞ってくれた。偶然に立ち寄ったようにみせていたが、そうではなかったらしい。直属長官のインゾフ将軍は、ポロジノ会戦の英雄ラエフスキイ将軍の申込れ——詩人をこれからコーカサスを経てクリミヤに連れて行く——を断ることもしないで、詩人のために旅費を借り出す心配までしてくれた。

5月28日の朝、ラエフスキイ将軍の一行の有蓋馬車のひとつに同乗して詩人はマリウポリ街道を南下、アゾフ海を東にみて、港町タガンロークを通過、ノヴォチェルカスクから再び南下してドン川を渡った。

コーカサスの山々を目指して進む。その行程の各所は、農民がたびたび蜂起して占領を繰り返したところに当っていて、Стенька Радин や Пугачев の乱に因んだ物語・伝説・歌謡に詩人は大きな好奇心をもやした。

6月4日、コーカサス山脈の玄関口であるスターヴロポリを通るあたりからは岬々たる山巔が万年雪をかぶって、なにか不動の雲が居すわっているようで、それが雲ならぬのは不動であるからであり、朝から夕暮にかけて日光を受けて、雪の色彩が変わってくる。

北方ロシアの樞の森、白樺、菩提樹の並木、小川のせせらぎとは全く趣きを異にする荒々しい大自然のうちに、粗暴なチェルケス人が、いまだロシア人の征服に心従せず、折りあらば旅人を襲う機をねらっている。

タタール人も危かしい。新植民地を警備するコサック兵哨基地がクバーニ川畔にあって、プーシキンはこれを見て、いつでも戦闘に応ずる騎馬訓練の美事さに感心して弟 Лев に長文の便りをしている。

その手紙には——

И—там, где бедный офицер безопасно скачет на перекладных, там высокопревосходительный легко может попасться на аркан какого-нибудь чеченца. Ты понимаешь, как эта тень опасности нравится мечтательному воображению. ⁽¹⁰⁾

危険を予感する幻影が、どれほど空想力をかき立てることか——と詩人は手離しで、危険地帯をすすむ冒険をよろこんでいる。この状況は、後になって《Кавказский пленник》の創作上の酵素となるだろう。一行がコーカサスの温泉地 Горячие воды (のちの Пятигорск) に着いたとき、將軍の長男アレクサンドルと会う。彼は前途有望な青年士官として対ナポレオン戦に獵兵連隊に勤務して従軍中に隻脚に傷を負い、いまは歩兵少佐としてこの地にあって療養中。彼はバイロンの愛読者で、Childe Harold's Pilgrimage をプーシキンに読んで聞かせたりしたようである。詩人はこれより9年後にこの地方を再訪したとき、かつての交友をなつかしく回顧して、「Подкумок 川の水音に耳を傾けて私はよく А. Раевский と河畔に坐っていたものだ。」といている⁽¹¹⁾。

コーカサスにほぼ2か月滞在した一行はケルチを経て黒海沿岸のフェオドーシャに達した。港には軍から提供された横帆二本マストの兵船《Мингрелия》が待っていた。

將軍はナポレオン戦の雄者であっても、そのような気配をすこしもみせない。その次男ニコライとはペテルブルグでの知人であり、詩人よりは、ひとつ年下である。

いま、帆船はフェオドーシャを去って、クリミヤ半島を南西に沿って走ること150キロの寒村グルズーフにむかっている。グルズーフには將軍夫人が長女エカチェリーナと次の娘エレナと共に別荘に住まっている。

その夜のことをプーシキンは弟 Лев 手紙で知らせている——

ぼくは夜通し睡らなかった。目のまえには南国の山脈が霧につつまれて続いていた——船長があれがチェツイルダルクだと教えてくれたが、ぼくは分らなかったし、分ろうとする気もしなかった。夜明けになって、ねむった。

彼は甲板にひとり立って舳先きにつぎつぎに湧いて絶えない白波を見入っていたかもしれない。そのとき、首都を去って久しい後に始めて詩神の訪れを感触したのかもしれない。ハッチを駈け降りてキャビンの鍵を求めてニーキタにどなりつけ、ドアを蹴破るようにしてキャビンに入ってペン

を走らせて⁽¹²⁾次のような詩行を書きこんだ——

Погасло дневное светило :
 На море синее вечерний пал туман,
 Шуми, шуми, послушное ветрило,
 Волнуйся подо мной, угрюмый океан,
 Я вижу берег отдаленный,
 Земли полуденной волшебные края ;
 С волненьем и тоской туда стремлюся я,
 Воспоминая упоенный...
 И чувствую: в очах родились слез вновь,
 Душа кипит и замирает;
 Мечта знакомая вокруг меня летает;
 Я вспомнил прежних лет безумную любовь,
 И все, чем я страдал, и все, что сердцу мило,
 Желаний и надежд томительный обман...
 Шуми, шуми, послушное ветрило,
 Волнуйся подо мной, угрюмый океан,
 Лети, корабль, неси меня к пределам дальным
 По грозной прихоти обманчивых морей,
 Но только не к берегам печальным
 Туманной родины моей,
 Страны, где пламенем страстей
 Впервые чувства разгорались,
 (下 略)

きらめく陽が沈んだ。
 藍色の海には たそがれのもやがおりた。
 さわけ さわけ おとなしい白帆よ。
 わが足もとに波わきたたすがいい 陰鬱な海原よ。
 わたしには見える はるかなる岸辺
 南の陸地の魅惑にみちた国々が。
 おののきとうれいを抱いて わたしはその地を目ざそう
 追憶の思いに うっとりとして……

すると感じとる 双のひとみにふたたび涙のわきあがるのを。

心はたぎりたち またも沈んでいく。

いつものあの幻が わたしのまわりをとびまわり、
わたしはたちまち思い浮かべる すぎる年月の狂わしい恋を、
わたしを苦しめていたことすべてをも 心にむつかしいものすべてをも、
欲望と期待をまじえた心悩ます偽りをも……

さわげ さわげ おとなしい白帆よ、
わが足もとに波わきたたすがいい 陰鬱な海原よ。
飛びゆけよ船 はるけき国までわたしを乗せていけ
うつろいやすい海また海の たけだけしい気まぐれにまかせて。

けれどもただ 霧につつまれたわが祖国の

いたましい岸边には いかずにほしい。

その国で 情熱の炎に

もろもの感情が はじめて燃えひろがり、

草鹿外吉氏 訳

これをバイロンの Harold がイギリスを離れての船出の最初の夜の感
懐と比較してみると——

1

'Adieu, adieu! my native shore
Fades o'er the water blue;
The Night-winds sigh, the breakers roar,
And shrieks the wild sea-mew,
Yon Sun that sets upon the sea
We follow in his flight;
Farewell awhile to him and thee,
My native Land—Good Night!

2

'A few short hours and he will rise
To give the morrow birth;
And I shall hail the main and skies,
But not my mother earth. (下略)

8 (上段4行略)

For pleasures past I do not grieve
 Nor perils gathering near;
 My greatest grief is that I leave
 No thing that claims a tear.

10

'With thee, my bark, I'll swiftly go
 Athwart the foaming brine;
 Nor care what land thou bear'st me to,
 So not again to mine. (以下4行略)

1

されば別れん！ ふるさとの岸边は
 青き波間に消えてゆく
 夜風は吐息をつき 荒波は吼え
 鷗は甲高く叫ぶ
 日はかなたの海に沈みゆき
 われら そのあとを逐いゆかん
 日よ、さようなら そして なんじ
 わがふるさとよ——やすらかに眠れ！

2

いくばくの時もたたぬに 日はまた昇らん
 朝はふたたび生まれよう
 そしてわたしは大海原と大空を讃えるだろう
 だが ふるさとの地をみることはあるまい

8

過ぎし悦楽をわたしは悲しむまい
 せまりくる危難をも嘆くまい
 わが大いなる哀しみは ふるさとを去るとも
 涙を強いるもののひとつだになきこと

10

船よ、おまえとともに疾く疾く行こう

泡立つ海原にあらがいつつ進もう
 いずれの国にわたしを連れてゆくとも
 ふるさとでなくば 厭いはせぬぞ⁽¹³⁾

引用が長くなるので省略したが *Pilgrimage* のヒーロたるハロルドは暮色せまる海上から、故郷の岸辺が次第にかすんでいくのにむかって *Adieu! adieu!* と素直な哀しみを表現して読者も哀愁を感じる。そして小姓が悲しく母を思っているのに同感する。つぎに従者が残した妻を思っ、妻は泣いていることであろうと言うのを聞いて、ハロルドは、それも新しい恋人がじき涙を乾かしてくれるさ、と突っ放した皮肉を言う。わが愛犬だって、こんど私が家郷に帰ったら私を忘れているだろうと冷たい予言をする。そして最後に、船は私を何処へ運んでくれてもよいが、もう故郷だけはお断りだと結んでいる。これは音楽の *Crescendo* に似て漸次に強音を重ねる発想法で、*misanthrope* の心理を巧みに描いて行く。

この詩行をことごとくバイロンの冷たい心を示すものとして、一語一語を文字通りに解釈するソビエトの碩学もいるが、バイロンが国を離れるとき取った行動を考えてみるのも無駄ではなからう。出帆の日、彼は親友の *Delawarr* が「買物があるので」と言って逢いに来なかったことに腹を立てている⁽¹⁴⁾。また、犬の心などは当てにならんとハロルドに言わせておるが、バイロンその人は、人間のウソの多いのに対して、犬はいつも主人に忠実だとして、犬を葬った碑文として、*Inscription on the monument of a Newfoundland Dog (1808)* を残している。また、バイロンは母と会うこともしないで離国してしまうが、これはこの親にしてこの子ありで、別離に際しての幼少時代からの口論を避けたかったとも見れる。ここのところはバイロンの祖先がもつ海洋精神の血が伝わっていて、決然と勇途に就いた気概を現わしたものと解釈しても構わぬと思う。

プーシキンにあっても、悲しんでばかりではなかった。見知らぬ南国には、まだ見聞したいことが無限にある筈だ。しかし故郷に残さざるを得なかった友人も恋人も劇場も名残り惜しくて悲しみの涙も出る。しかし、彼

はいま21才の青年だ。むしろ新天地の未知なるものが自分を招いている。この点でプーシキンは、哀と歎がこもこも波寄せる心のうごきを正直に述べている。それなれば、プーシキンがここで / Но только не брегам печальным / Туманной родины моей / との一節は、バイロンの / Nor care what I and thou bear'st me to, / So not again to mine, / とあまりにも奇妙に一致している。Д. Д. Благойはこのところの不調和についてこう述べている。プーシキンは Harold を本で読んだことはなかった。しかし、耳で聴いて知っていたので、(ペテルブルグの友人からであろう)、船上の人となったとき、イギリス詩人と同じような situation が思わず類似の表現となって出たろうと想像している。

プーシキンのバイロン模倣がどの程度のものであれ、Погасло дневное светило は、まさに彼のバイロン世界への参入の第一歩であった。これからはロシアの詩人はますますバイロン作品に熱中していけよう。そしてバイロン作品の demonish なエネルギーの強さにとり憑かれて生まれたのが《Кавказский пленник》, 《Братья-разбойники》, 《Бахчисарайский фонтан》, 《Цыган》の四つの物語詩である。

4

プーシキンは1819年の前半にバイロンの *The Corsair* の一部を読んだ形跡があった。その後追放の身を暖かく迎え容れてくれたラエフスキ一家のグルズーフの別荘でニコライと同室して *The Giaour* を原語で読むことを日課にしたのは1820年の8月からのことである。ニコライは彼の読書を助けた。また、プーシキンが思いを寄せていたと思われる長女エカチェリーナも英語には堪能で、彼は彼女と文学論もたたかわせている。プーシキンはこの年の9月2日にインゾフ將軍の新任地キシニョーフに移る。そのキシニョーフ時代にも引き続いて上述の作を読み、さらには *The Prisoner of Chillon*, *Lara* 等の Turkish tales のほか *Beppo* や *Don Juan* を貪るようにして読みすすんだ。プーシキンは常に古今の一流の作家には敏感にその長所を読みとってそれを勇敢に摂取していく。そ

こに些かのためらいもなく、そして単なる模倣に墮することはなかった。

1812年3月10日、バイロンは *Childe Harold's Pilgrimage* の出版によって一挙にしてイギリスの一流の詩人の榮譽をえて、たちまちにロンドン社交界の寵児となった。はやくも *Lady Caroline Lamb* との情事がはじまったが、この年の晩秋には彼女に絶縁状を書いた。激しい性格の *Caroline* の深か情を避けて、受動的でおだやかながら芯のつよい *Lady Oxford* との静かな恋愛の営みを経て、バイロンに束の間の静謐が訪れた。それも *Lady Oxford* が身をひくようなかたちでバイロンと別れることとなり、異母姉 *Augusta Leigh* との一言では表現しがたい関係が生じてバイロンの生活には次第に複雑な焦立たしい不協和音が混じるようになった。そして心中の *demon* に克つため、また、彼が日記のなかで述べているように――

なんらか、わたしに執筆の動機があるものとすれば、(ああ、呪わしい私のわがまま勝手よ!) 私から私自身を引き抜くこと、ただそれだけが唯一の、すべての、心からなる動機である。―― *Journal: Nov. 27, 1813.*

To withdraw myself from myself なる動機で書かれたのが *The Giaour* である。その後、3年未満の間に詩人は *Bride of Abydos*, *The Corsair*, *Lara* を出版したが、そのエネルギッシュな活動は、古風な表現をすれば、まさに堤を切って流れ出た大河の奔流の勢いにも似ていた。次の年、かつて求婚したが拒絶され、再びの求婚して承諾を得えた *Annabella Milbanke* との結婚生活も、はじめから破綻を生じ、*Hebrew Melodies* 一編を生んだだけであったが、翌1816年の2月に *The Siege of Corinth* と *Parsina* を同時出版した。

バイロン自らが *Turkish tales* の名を与えた5篇のほかに ≪*Parisina*≫ 1篇を加えての6篇を総称して *Eastern tales* と称する研究者もあるが、バイロンの名称を踏襲することにして、その第1弾である *Giaour* を特に入念に調べてみたい。それはこの作を吟味するところで他の作のストーリーの組立て、イデーの挿入方法、作者の優れた詩才と、また作者の

通弊を改めて指摘する労が省かれるものと念ずるからである。

そしてまた、*Turkish tales* のみを特に取り上げる理由はそれらがプーシキンの南方詩4篇の構成に大きな影を投じているからである。

《Граф Нулин》が *Верро* によって触発され、《Полтава》の一部が *Мазерра* の軽快さに触発されたことは汎く知られているが、本稿は表題の相互関係だけに絞って扱わせていただきます次第。

バイロンは推敲ということを嫌い、推敲などをやると書き続ける意欲を失うと言っている。そのため *The Bride of Abydos* の1,200行あまりを4日間で書きあげている。まことに偉才と称せねばならぬ。ところが *Giaour* は初版685行を、次版ではある行を削り落すか、あるイデーの2,30行を追加したり、ある数10行を別のところに配置転換したりして第7版までそうした作業を続けていって、1334行に増していった。それ故、一読しただけでは筋が捉え難く、その分りにくさに釣られて読者がついていくことになる。T. S. Eliot の如き詩人にして大批評家たる人はバイロンを真の詩人として認めないが、それでも *Giaour* を高く評価している⁽¹⁵⁾。バイロンはこの作に於て、人物が演ずる決定的モメントを、時間的順序から解体し、換言すれば、発生した行為を時間の系列から解放し、そのことに依って或る行為の意義（行為の結果）を考えようとする。そうした *dislocation* を行うことによって、作者は作中人物のモメントに仮託して、愛とその死、美（あるいは美人）とその死、悪行とその死、徳とその死、それのみか、それら凡ての行為とその死を考えようとする。そのために *dislocation* を施して、都合のよい場所を選んで *digression*（逸脱）を挿入するが、その逸脱がよく利いている場合は、読者の受ける印象も深くなるということになる。

さて、この作品中の各モメントを叙述されたままに、換言すれば *dislocate* されたままにこれをここに記入して行って、これに数字1, 2, …を与えてみよう。それが終わってから時間的継続の順序に組み変えてみよう。すると、そのストーリーは非常に単純なことを知る。バイロンは読者

に suspense を与えようと図ったかもしれない。そのために plot の仕上げに相当の苦心を払ったとも思えるが、そのほかに考えうることは、作者と作中人物を、ある程度に分離する必要を自覚したのかもしれない。それは *Childe Harold's Pilgrimage* のなかで、作者はときどき、Harold を舞台から押しつけておいて作者の感懐を長々と弁じ立ててしまってから、*"But, where is my Harold?"* と気がついたかのように Childe に引き返したりする場合があって、その体験もあってこのような試みをしたのかもしれない。ここで筆者は *Giaour* に紙数を多く与えすぎないように思う。この作以外の Turkish tales は、むろん舞台も人物もそれぞれ違うとしても、その素材を選ぶ視点には共通特色があるから、*Giaour* 1 篇を詳しく考えてみれば、他の諸篇を最短に要約できる利点がある。その意味で、やや冗長に流れる弊をお赦しを願って筆をすすめたい。

Giaour の冒頭は、バイロンが敬愛する Thomas Moore の厭生的詩篇を掲げることから始まる。Samuel Rogers への献詞が続く。次いで、Advertisement として作品の梗概を語る。—— Venice 共和国の時代に、オスマントルコの支配からの独立を試みたギリシャ人は、ロシア兵の支援を受けて Morea 半島で蜂起したが、反ってトルコの大弾圧を招いて多大な虐殺事件となった、1770年代のことであると紹介し、この物語はトルコの太守の女奴隷 Leila が、太守の寵を裏切って Venetian と恋仲になったため、不貞の罪の報いとして海中に沈められた事実に基くものであるという。そして、ギリシャの美しい自然を詠ずる。

No breath of air to break the wave
That rolls below the Athenian's grave
That toms which, gleaming o'er the e'liff,
First greets the homeward—veering skiff,
High o'er the land he saved in vain:
When shall such hero live again?

そよともうごかぬ大気は かのアテナイ人の墓の

その下を流るる波を乱しもしない
 その墓は崖の上にかがやいて
 まず、家路にむかう小舟を迎えてくれる
 だが、墓の主はこの国土をなんのため救ったのだろうか
 空しいかな かかる英雄がまた生まれようか？⁽¹⁶⁾

墓に眠る英雄はアテナイの政治家 Themistocles と推定されていて、480 B.C. 彼はアテナイ海軍を指揮して Salamis でペルシャ海軍を撃破したが、バイロンはかかる英雄が活動した往古のギリシャの栄光にひきくらべて、いまトルコに隷従したギリシャ人の汚辱は歎かわしい限りであるとの詠嘆をこめつつ、この国土の絶妙な景色を描く。バイロンの東方もののほとんどすべてにおいて、鮮烈にして甘美な自然が展開され、その次に人物が現われる。

余談ながら、詩人はこの作を出版後、T. Moore に手紙を送って、物語は事実に基いている、わたしがアテネ滞在中に、ある少女が身持ちが悪いとて海中に溺死させられようとしたところをわたしが救ってやった、とわざわざ報告している⁽¹⁷⁾。このようなことが手伝ってか、異教徒とは、バイロンその人のアヴァンチュールを述べたものだろうと読者が想像するようになったが、世人は東方詩の物語が次々に出るたびにそうした想像を逞しうして、Byronic hero に夢中になった。

[1] ひとりの漁師が漁をおえて、夕まぐれ、舟を漕ぎつつ帰路に就いていると、不意に彼が見たシーンは――

Who thundering comes on blackest steed,
 With slacken'd bit and hoof of speed?
 Beneath the clattering iron's sound
 The cavern'd echoes wake around
 In lash for lash, and bound for bound;
 The foam that streaks the courser's side
 Seems gather'd from the ocean-tide: *line. 180*

誰か？ 漆黒の馬に跨がって物音あらあらしく

馬銜^{ハミ}をゆるめ 蹄を急がせて駆けてくるは？
 やかましい蹄鉄の音が鳴って
 山々にひびいてこだまする
 ひと鞭 またひと鞭 ひと跳び，またひと跳び
 駿馬の腹に泡汗がながれて
 海の大潮を浴びたようだ

漁師その人はイスラム教徒だ，とは作者は告げていないが，そうであることは，馬上の人を見たとき，漁師が，*I know thee not, I loathe thy race* と呟くことから判断できる。

しかも，時が時，断食が終って饗宴が始まろうとして，マスケット銃がひびきわたり，幾千の灯が mosque に輝きはじめたこの夕刻に，騎上の男はその着衣から見て giaour（異教徒）であるに違いないが，何を好んで，イスラム教徒にとってこの大事な行事の時に，あのような傍若無人な疾駆を行うのだろうか——というのが漁師の思ったことである。また，異教徒のあの人相も忘れ難い。

Though young and pale, that sallow front
 Is scathed by fiery Passion'brunt;
 Though bent on earth thine evil eye,
 As meteor like thou glidest by,
 Right well I view and deem thee one
 Whom Othman's sons should slay or shun

l. 194 ⁽¹⁸⁾

さらに，この兇々しい容貌の男は，海岸線を走りつつ，突出した巨岩を迂回したとき，ちらと漁師が捕捉したその特徴は——

騎乗の人が現れたのは，イスラム教徒の断食を告知するためにマスケット銃の音が夕空にひびき，mosque に幾千の灯が輝き，信徒たちが蕭かに祈禱を始めようとするときであった。

To-night—but who and what art thou?
 Of foreign garb and fearful brow?

And what are these to thine or thee,
That thou should'st either pause or flee?

l. 230.

この疾駆の理由は漁師にはわからぬ。しかし、騎上の人のもう一つの異様なまでに殺気立った気配は、目撃者たる漁師に強い印象を与える。

He stood——some dread was on his face,
Soon Hatred settled in its place:

彼は馬をとめた——恐怖らしきものが顔に現れたが
じきに憎悪がとって代った

騎者がこうした表情の変化を見せる理由は、まだ読者にはわからない。騎者は馬腹に拍車を手荒らに当てて姿を消す。それから 200 行ほど読みすすむと、騎者はこの夕に Hassan の愛する女奴隷としめし合わせて、脱走する手筈が整っていたのに彼女の姿は現われなかった。当然、女はどうなったことかと疑問をいただくようになり、騎者とはどんな男かしら、もしかしたらバイロンその人がギリシャで行なった冒険が語られるかもしれないと思うようになる。

〔2〕 騎者、すなわち異教徒はアフリカ大陸から吹きこむ simoom (熱風) のように、忽ち現われて忽ち消え去る。

Woe to that hour he came and went!
The curse for Hassan's sin was sent
To turn a palace to a tomb; *l. 279*

彼は来た、そして去ったあの時こそ禍いの時だった!
Hassan の罪業に対する呪いが放たれたのだ
宮殿を墳墓に変えてみせるぞとの

不吉な男は太守の宮殿にこんな結果を及ぼしたのだ。宮殿は全く全盛時の姿を失ってしまった。厩舎からは馬が消えた、奴隷たちも四散した、クモの糸が宮殿の壁にまとわっている、ユウモリが部屋を棲み家にしてしま

ったし、フクロウが塔に住みついた。飢えた犬が吠える。むかし、滾々と溢れ出て、大理石の縁から水が流れ落ちた噴水は、いまは涸れんばかりだ。雑草が茂っている。あの噴水は——

'Twas sweet of yore to see it play
 And chase the sultriness of day,
 As springing high in the silver dew
 In whirls fantastically flew,
 And flung luxurious coolness round
 The air, the verdure o'er the ground. l. 299

この噴水を Hassan は、まだ幼いときに母の手にひかれて眺め入ったこともあった。Hassan も人の子。無心に噴水の戯れに見入ったこともあったろう、と詩人は述べる。

〔3〕 こんどは別の narrator, あるいは別の reporter が、読者が気がつかぬ間に現われて別のシーンを語り出す。太守らしい人物が部下を従えて船頭に近寄ってくるが、微行姿といえ、その着用している緑の袍衣から察すると Emir (マホメット直裔の支配者) にちがいないので、船頭は恭々しく敬礼して、お手にしていらっしゃる大事なお荷物は、と問うので、太守は質問を遮ぎるようにして手短かに、汝の仕事は直ちにトモヅナを解いてわれらといっしょに海中に漕ぎ出でて、岩と岩との間の波静かなところにこの荷をおろすことだ、汝の航海はじきに終わるだろうが、容易に終らぬ旅 (死への旅を指す) もある、と言いかけてから口をつぐむ——

Yet 'tis the longest voyage, I trow,
 That one of——

その続きを詩人の目が語ってくれる。箱を海中に投入するという恐しい行為も、背景の美しさと相映じて、なにか美しい儀式のように思える——

Sullen it plunged, and slowly sank,
 The ealm wave rippled to the bank;

I watch'd it as it sank, methought
 Some motion from the current caught
 Bestirr'd it more, — 'twas but the beam
 That checker'd o'er the living stream:
 I gaz'd, till vanishing from view,
 Like lessening pebble it withdrew;
 Still less and less, a speck of white
 That gemm'd the tide, then mock'd the sight;
 Known but to Genii of the deep,
 Which, trembling in their coral caves,
 They dare not whisper to the waves. l. 374

太守が沈めた荷物のなかみはなんであったかは、まだ読者に告げられていない。

それに続いて、digression（逸脱）が展開される。

本筋から外れて、作者が気紛れな空想をはじめたかのように見せかけつつも、ふたつのテーマを語り始める。ひとつは (l. 389~ 421), 美しい蝶に魅せられた少年は蝶を追って走り廻る。蝶は高くに飛び去ってしまい、もう手が届かない。それでも諦めきれない。大人の男も同じだ。女に焦がれて追いかけて追いかけて疲労困憊して失意の苦しみを得るだけだ。たとえ恋人を手中に収めたとしても、狩猟本能を満足させるだけだ。

So Beauty lures the full-grown child,
 With hue as bright, and wing as wild:
 A chase of idle hopes and fears,
 Begun in folly, closed in tears,
 If won, to equal ills betrayed,
 Woe waits the insect and the maid;
 A life of pain, the loss of peace;
 From infant's play, and man's caprice: l. 369

女も苦しむことになる。しかも、せっかく手にした女を男は惜しげもなく捨ててしまうのは、少年がとらえた蝶の翅が傷んでも意に介さないのと同様である。

次にバイロンは第2の《逸脱》を展開してみせる。それは、犯した罪に因る深い悔恨の念を取り扱っている (l. 421~438)。火焰にかこまれたサソリは、火焰の環が狭くなるにつれてもがき苦しんで、ついに耐えきれなくなってわが毒針をわが胸に刺して死ぬといわれる。人の心も、悔恨の念に苛まれることが際涯なく続くときは――

So writhes the mind Remorse hath riven,
Unfit for earth, undoomed for heaven,
Darkness above, despair beneath,
Around it flame, within it death! l. 635

人界にも天界にも心を安んじ得ないときには、心は死ぬよりほかない。バイロンが最も激しく吐露してみせたい題目がここにおいて伏線として敷かれる。しかし、その苦しむ人は Hassan か、それとも騎者（異教徒）かはここでは触れられていない。これが第2の digression である。

トルコ人は語りを続けて、こんなことを述べる。彼女が失踪した晩には妙な噂が街にひろがったものだ。断食齋が終って、これから宴が始まるという知らせに、無数の灯が寺院に点ぜられた晩に Hassan は怒り狂うようにして Leila を探していた。Leila はグルジャ風の小姓の姿をして後宮を脱出して異教徒のもとに走ったらしい。Hassan はうすうす感づいていたが、彼女の愛らしさに迷って気をゆるしていた。監視にあたるべきアビヤ人宦官も任務を疎かにしていた。しかし、こんな噂をするものもいた。あの漆黒の馬を馳せていた異教徒は、拍車を激しく馬腹に当てて駆け去ったが、彼の鞍の後部には、小姓も女も見かけなかったというのだ。

次に、男の独白が始まる。これは Hassan の独白らしい。猛々しい男が Leila の容姿を追想し始める――

Her eye's dark charm 'twere vain to tell,
But gaze on that of Gazelle,

It will assist thy fancy well;
 As large, as languishingly dark,
 But Soul beamed forth in every spark
 That darted from beneath the lid,
 Bright as the jewel of Giamschid,
 Yea, Soul, and should our prophet say
 That form was nought but breathing clay,
 By Alla! I would answer nay; l. 474—482

彼女の美しい目を口で言ってみようとするのは無駄なことだ
 だが、あのアフリカ羚羊の目をみつめてもらいたい
 そしたら汝の想像力のたしにはなろう
 黒く、大きく、もの悲しいひらめきが
 あの臉の陰から発するのは魂の働きだ
 その明かるさは Giamschid 王秘蔵のルビーそのまま
 まさに魂のものだ。ですからコーランのなかで、たとえ
 生命に宿る形態は塵にすぎぬと仰せあっても
 アラーの神よ。そのおことばはそのまま返上します

たとえ、天国への入り口となる Al-Sirat の橋上を自分が渡るときが
 来たとして、そこで天国の美女がこちらを招き入れようとして、‘woman
 is but dust’ とか、女は ‘A southless toy for tyrant’s lust’ という
 教典の文句を聞かされる羽目になったとしても、そのことばには納得でき
 ぬ、と Hassan はいう。のみならず、彼女の頬はザクロの花に勝って紅
 いとか、その丈なす髪が床の上に垂れるときはヒヤシンスが流るるかと思
 われたとか、…… her feet Gleamed whiter than the mountain
 sleet, Ere from the cloud that gave it birth, It fell, and caught
 one stain of earth’ と彼女を讃え、彼女は Circassia⁽¹⁹⁾ の娘であ
 って Circassia で最も愛らしい小鳥だとまで言いきる。

〔4〕 場面は3転する。——無名のトルコ人は次のように語り出す。

Black Hassan from the Haram flies,

Nor bends on woman's form his eyes;
 The unwonted chase each hour employs.
 Yet shares he not the hunter's joy.
 Not thus was Hassan wont to fly
 When Leila dwelt in his Serai.
 Doth Leila there no longer dwell?
 That tale can only Hassan tell: l. 439~446

黒き Hassan は後宮を出て馬をはしらせるが
 女の容姿には一顧も与えない
 しばし遠ざかっていた狩猟を終日やってみても
 狩人のよろこびは戻ってこない
 Leila が閨房にあったときに
 遠出をしても そんなことはなかったのだ
 では、Leila はもうそこに住んでいないのか?
 それは Hassan だけが知っていることだ

Stern Hassan hath a journey ta'en
 With twenty vassals in his train,
 Each arm'd, as best becomes a man,
 With arquebuss and ataghan:
 The chief before, as deck'd for war,
 Bears in his belt the scimitar
 Stain'd with the best of Arnaut blood, l. 519

Hassan は新しい旅に出発するが、それは彼を裏切って異教徒のもとに走った Leila の代りに、貞節な花嫁を求めての旅であった。20人の部下が太守の供をする。従う部下はめいめいの武器を携える。arquebuss (銃身の長いライフル銃) とか ataghan (刀身がS字型に曲がって先端が鋭くて鍔のない刀) などは、バイロンが東地中海方面を旅行したときの見聞と、かねがね興味をもって耽読した書籍から得た知識を混ぜ合わせたものである。一行が騎馬で進むところはギリシャ中央部にそびえる Liakura (Mt. Parnasus のこと) の麓の隘路である。夏の落日が山頂に燃え

ている。落雷のため山頂から突き落された大理石の破片が路を塞が**ん**ばかりに散乱し、夏涸れの河床が路となってほそぼそと延びている。

The foremost Tartar's in the gap
 Conspicuous by his yellow cap;
 The vest in lengthening line the while
 Wind slowly through the long defile:
 Above, the mountain rears a peak,
 Where vultures whet the thirsty beak,
 And theirs may be a feast to-night,
 Shall tempt them down ere morrow's light; l. 549~

峠道を余人にさきがけてすすむタタール人は
 その黄色の帽子で際立っている
 つづく兵どもは長い縦列となって
 狭道^{さみち}をゆるゆるすすむ
 空のかなた、山巔がそびえるところに
 飢えたハゲタカがくちばしを磨いている
 そのくちばしは今夜、ご馳走にあずかるため
 夜も明けやらぬうちに地上に舞いおりるだろう

やっと難所を通りぬけて、松林が見えるようになって、一行が馬を急がせようとしたとき、銃声がひびいて先頭のタタール人が転落して地面を噛む。手綱を締めて見廻わすひまもなく3人の兵も射たれて倒れる。岩を盾としようとする者、馬首の陰で応戦しようとする者どもを叱りつけて、Hassan 一人は馬上のまま立ちむかう。この伏兵を指揮する男が近づいてくる。その馬が後脚を跳ねあげるのも、これを制しようとした若い男の顔が Hassan の目にとまる。あの異教徒めがこちらに不意うちをしかけたのだ。

"Tis he!'tis he! I know him now;
 I know him by his pallid brow;
 I know him by the evil eye

That aids his envious treachery;
I know him his jet-black barb, l. 610

異教徒の人相は、gothic villain として好んで描かれてきた人相を備えている。pallid brow, evil eye, jet-black barb などの諸特徴は、海賊 Coarnd のそれと共通している。

Hassan と異教徒は死にもものぐるいで格闘する。友人とは別離の時を待つ。恋人とは不信の時を待つ。しかし、憎悪は永久につづく。詩人は2人の憎悪をこのように描く——

Ah! fondly youthful hearts can press,
To seize and share the dear caress;
But Love itself could never pant
For all that Beauty sighs to grant
With half the fevour Hate bestows
Upon the last embrace of foes,
When grappling in the fight they fold:
Friends meet to part: Love laughs at faith;
True foes, once met, are joined till death! l. 645

殺されても Hassan の遺恨は消えず、その目は、死してなお、殺害者の顔を見ているかのように——

His breast with wounds unnumber'd riven.
His back to earth, his face to heaven,
Fall'n Hassan lies—his unclosed eye
Yet lowering on his enemy,
As if the hour that sealed his fate
Surviving left his quenchless hate;
And o'er him bends that foe with brow
As dark as his that bled below. — l. 667~

Hassan の母は、息子が花嫁を迎えるのを祝って贈物を持って訪ねてくれるのを待っている。高い窓から牧場を眺めつつ、なぜ息子の一行はこ

んなに遅れるのか不審がっている。日も暮れ出した——

The browsing camels' bells are tinkling:
 His mother looked from her lattice high—
 She saw the dews of eve besprinkling
 The pasture green beneath her eye,
 She saw the planets faintly twinkling: I. 689

ところが息子の行列は現れず、現われたのは足取り重く門内に辿り着いた僅かひとりのタタル兵。そしてその母君に差し出されたのは、引き裂かれ血に染まった Hassan の頭巾だけ。これが待ちに待った息子からの贈物となった。あまりにも痛ましい贈物だった。

また、トルコ人が narrator として語り次ぐ。あの淋しい山路で Hassan が命を失った場所にはひとつの柱が立っている。雑草が繁るままだになっているが、柱にはコーランからの一節が書かれていて、いまは判読も難しいほどだが、太守の魂は天国で安らかに憩っているにちがいない、なぜなら彼は邪教の徒と戦って倒れたからだ——と、そのトルコ人は素朴に考えている。

[5] こんどは場面が全く変わってしまう。オスマン・トルコの支配する国土からは海をもって隔てられた、どこかのキリスト教徒の国土にある修道院のなかでの会話となっている。あれから6年を経た夏のある日、物語の最初の narrator であった漁師が、修道院に隠遁している不思議な僧を見た覚えがあるが、あの僧の素性をご存知ですかと、院内の僧に質問するところから会話が始まる。「なん年かのむかしのこと、わしはわしの国の海辺を、あの男がものすごい勢いで馬を駈けさせているところを確かに見た。

……I saw that face, yet then It was so marked with inward pain, I could not pass it by again; その顔には陰気な精神が宿っていて、死の刻印がきざまれていたもので、とても今でも忘れられない」これに答えて院内のひとりの僧は「口をつぐんで、彼は犯した罪のことを告げようとしなけれど、なにか暗い行為があつて、ここに安息を求めてやっ

てきたらしい。といっても晩禱にも出ない。讚美歌も香煙も無視するばかりか、告解のため跪くこともしない、彼の人種も宗教もさだかでないが、どうもキリスト教に背いて、そのことで後悔しているようでもある。聖餐も葡萄酒も口にせん。修道院長に莫大な贈物をしてここに住まわせてもらっているが、こんなとんでもない奴を修道院に留めておくのは困ったもんだ。幻覚におそわれて、海中に沈められた女だとか、剣に倒れた回教徒とか、なにやら口走ったりする。あいつは崖に立って、なんか血にそまった手といった格好で海にむかって、まるで肩から腕をもぎとらんばかりに狂おしく、あいつだけに見えるものに突っかかるようにして身をのり出したりするのをみると、海の波が彼を墓場に招いているような気になるわい」

この奇体な隠遁男は、自分の過去の秘密を修道僧に向って実にながながと語り続ける。全詩行1334行のうち、1—831行までが、Leila を繞っての異教徒と Hassan との闘争劇に充てられたのに対し、832行から最終行に至る行は殆んどが異教徒の独白に充てられる。異教徒は会話の相手が反駁に出ようとする、いち早くも相手の言いそうなことを先き廻りして喋って、ひたすら自己の内面世界を呈示して、いつやむとも思えない。この点で、まさに Manfred の先駆を成す作品である。異教徒は語る——

“I loved her, Friar! nay, adored—

But these are words that all can use—

I proved it more in deed than word;

There's blood upon that dented sword,

A stain its steel can never lose:

Nay, start not—no—nor bend thy knee,

異教徒は Leila の姿をどうしても忘れ得ない。彼女を死なせた原因が自分にあることを夜も日も考え続けて後悔・怨恨に苛まれる。更に、わが罪は、いかなる告解によっても拭われる見込みはない。私に告解を勧告することはお断りしたい、と言って、その名も告げず、どこかへ去ってしまった。

この作中のそれぞれのモメントを元来あるべき筈の時間的序列に組み変

えてみると——発端の〔1〕の、騎者が海辺を疾駆して消えさったことは、そのままよい。その次に〔3〕が来る。Hassan が部下に持たせた荷のなかの実体は Leila の死体、あるいは、生けるままであったものを深海に投棄した。その結果として、太守が Leila を追慕してやまない独白となるし、詩人はそれに関連して男女の情熱の愚かしさ、空しさを述べ、また、悔恨の無限地獄を述べる逸脱を展開した。その次は〔4〕がくる。Hassan が新しい妻を迎えんとする旅中で異教徒に殺される。そのため、主を喪った宮殿は荒廃して行くことになるので〔2〕がくる。そして、エピローグとして〔5〕がくる。1, 3, 4, 2, 5が歴史的順序にほかならない。

5

Giaour の次に出た作品 *The Bride of Abydos*:

場面は Dardanelles 海峡のアジア側沿岸の Abydos。パイロンは足に障害ある体であっても、ここを立派に泳ぎにきて、大いに気をよくして、それに伴う詩も書いている。(プーシキンは乗馬強行をやったのけたし、射撃の練習を欠かさなかったキシニョフ時代がある)。その地のトルコ太守 Giaffir には愛娘 Zuleika があって、知事に嫁がせようとしている。太守には Selim という息子もある。この妹と兄との間には兄弟の関係以上の愛着があるようだ。Zuleika は縁談に心がすすまないことを兄に告げる。兄は、お前の居室になっている塔を今夜、抜け出してきたならば、お前に告げたい真実があるという。ついでながら、父王はこの息子は武芸も知らぬ柔弱者だとして軽蔑していて、世の常の父子関係と趣きを異にしている。兄は妹を、居城のある崖の下の海辺に導いて洞穴に至る。兄はこんなことをいう。実は私は Giaffir 太守の息子ではない、私の父は現太守の兄たる Abdallah というが、弟たるお前の父に毒殺されたのだ。太守が私を愛さない理由はそこにある。私はお前の従兄にあたる。私はお前を恋人と思っている。私は老臣からことの次第を告げられたが、Giaffir が私を憎むのはそこからきているのだ。私は海賊の首領としてここに部下をもっているのだ。Zuleika よ、自由な海にお前といっしょに逃

れようではないか。それを聞いて Zuleika は Selim と相擁して接吻を交わす。だが、早くも太守の率いる一隊が松明をかざして洞穴に追ってくる。Selim は雄々しく応戦するが衆寡敵せず叔父に射殺される。太守は娘を発見できずして居城に帰る。しかし、あくる朝、洞穴には、Zuleika が Selim の屍のそばに息絶えたままに横たわっている姿が発見された。まさに極端な惨劇と言ってよい。これを評して、単なるメロドラマとして片付ける批評家もあった。しかし、この作を目して、Byron's Hamlet とする評者の意見は含蓄ぶかい。

前作 *Giaour* が読書界に於て多大な成功を得たる原因は何よりもそのヒーローの性格にあった。彼は悔恨に苛まれつつも同情心に満ちた Gothic villain のタイプに属し、またそのタイプに共通する特徴——Pale and gloomy brow や evil eye や bitter smile——を備えている。彼は墮天使の面影を宿し、that stony air Of mix'd defiance and despair (l. 907—8) とあるように、絶望に挑戦するように冷然たる表情を崩さない。これらの特徴の外に、世人が Byronic として受けとめ、またこれに陶醉したのはヒーローが懐く感動追求への熱気であった。この異教徒は修道士に語っている——I loathed the languor of repose (l. 987)。無気力と安逸を彼は忌む。こうした性格は *The Corsair* と *Lara* にも踏襲される。

The Bride of Abydos のヒーローたる Selim が Gothic villain であることは、彼が居城の誰にも気づかれないうで海賊の首領になりすましていた事実によって明らかである。しかし、彼が Zuleika に寄せる愛は非常に物優しいものがある。批評家のある人は、彼を純粋な “Hero of Sensibility”⁽²⁰⁾ と名づけている。その意味で彼は18世紀の前期ロマンチズムに共通する outlaw のタイプよりも更らに高貴な要素をもつことになった。この新要素こそロマンチズムの真価を示すものである。W. スコットはイングランドとスコットランドの境界に住む人びと (Borders) に高貴な心情を与えたが、バイロンはこれを受け継いで、その舞台を東地中海に移したと言える。

第3作 *The Corsair*:

Turkish tales のうち最も人気を博したもので、そのヒーローは題名そのものの「海賊」の Conrad である。

海賊の群れの首魁 Conrad の風貌は前述のヒーローのそれと似通うとけるが多い。his ferehead high and pale (1. 196) であって一般世俗の顔を超越した高貴な趣きがある。孤高・神秘を宿している。部下は首魁を絶体的に信頼し、首魁も部下を信頼している。Conrad は寡黙で、部下には手短かな命令を与えるだけで、部下からの質問を許さないし、彼らから離れて生活している。それでも部下が彼を尊敬するのは、彼の現場に於ける作戦指揮が的確有効であることを体験しているからである。巖上にある塔にいる恋人 Medora に彼は深い愛を寄せている。ある夜、彼は Medora と訣別して島を去る。このあたりにトルコの将軍 Seyd が海賊一掃を図って艦隊を率いて根拠地を構えているが、Conrad は托鉢僧に変身して将軍に面会を求める。海賊から身を守りたいとの口上であった。問答を重ねているうちに慧眼な Seyd は僧の正体に不審をいだき始めて僧を追求する。実は、Conrad は、その間に部下が忍びこんで要所要所に放火するのを待つための時間稼ぎをしていたのだった。将軍がまさに僧の面皮を剥ぐばかりになった瞬間に各所に火があがり、僧は黒い袈裟をかなぐり捨てると、鎖帷子に身を固めた姿が現れて忽ち剣を抜き将軍に襲いかかる。不意をくらって将軍は逃げ去る。海賊の一味は根拠地を焼きはらって引き揚げようとした。そのとき、火炎のかなたに女の叫び声を聞いたので、Conrad は駆けつけて救い出した。それは将軍の寵姫 Gulnare であった。将軍は咄嗟の危険に気を奪われて Harem の女を顧慮しないで逃げたのに、この見知らぬ海賊は危険を冒して自分を救ってくれたと思って見る男は雄々しい容貌である。ひどく惹かれる。海賊が騎士的な女性尊重の行為をしていたために戦機を逸する。Seyd は逆襲に転じて Conrad を捕えて獄に投ずる。こうなったら、海賊を待つのは死だけであるのに、豪胆不敵な彼は安らかな眠りにおちる。誰かが灯をかざして近寄ってきてわが顔を見たように感ずる——夢のなかで見る姿であろうか——

That from, with eye so dark, and cheek so fair,
 And suburn waves of gemm'd and braided hair:
 With shape of fairy lightness—naked foot,
 That shines like snow, and falls on earth as mute—

Canto The Second, l. 402~405

密かにやってきたのは Gulnare であった。そして言うには、機会を窺ってあなたを助け出します、と。そのみか、彼に寄せる激しい愛を口走る。海賊は、自分には、地上で愛を寄せる女はただひとりしかない、ほかにどれほど美しい女が現れても私の心は変らぬ、と言うので、Gulnare は恋を諦めるほかない。その後のある夜、彼女は約束したのように忍びこんできて彼を助ける。将軍を殺してきたので、彼女の手には血のりがついていて。Conrad が自分を愛していないことはよく分っている、もはや彼女の行くところは海賊の本拠よりないので Conrad の乗る船に同乗して島に着く。Conrad は急いで巖上の塔に駆けつけたが恋人 Medora は既に死んでいた。Medora は Conrad がトルコ側に殺されたものと思い違いをして自殺したのである。彼は海賊の群れを見捨てて姿を消してしまう。Gulnare も杳として消息を絶った。

この Conrad なる人物も、その過去が神秘につつまれていること、現在の強い人間ざらい、墮天使の趣き等に於て Gothic 的な色彩が濃い。第一作の Giaour が、Leila の死の原因となったことに深い悲しみを感じ、果てることのない悔恨に苦しんでいたのに対して、Conrad は「物優しい感情の人」である。敵の女奴隷 Gulnare の悲鳴をきいて敢えて救助に走ったり、その女の手には血のりのついているのを見て一種の不快を感じたりするほかに、なによりも心優しさを語る事実、彼が Medora に対して 'love—unchangeable—unchanged' (l. 287) を懐いていることである。この高貴な outlaw は、次の作品 *Lara* のヒーローとなって再出現をする。

Lara: 青年時代に故国を去って諸国を漂泊していた *Lara* は、なんの前触れもなく故国に帰る。伴うのは、ただひとりの美貌の小姓だけであった。彼は自分の過去については全く語らず、もし臣下がすこしでも探りを入れようとして話題をそちらにもっていかうとすると睨みつけて威圧・沈黙せしめる。この領主は過去になんらか罪を犯したらしいが、すべては秘密のヴェールにつつまれている。傲慢不遜、沈鬱な性格が際立っている点で更らに *Byronic hero* の度合いが濃縮されている。前作の *Conrad* より峻烈酷薄であって、剣を執ったら手心を加えることはない。その彼も敵に見出されて挑戦を受ける。部下・農民を率いて戦うが、戦野に倒れる。小姓 *Kaled* は殉死したがこれは女であった。さきに、*Conrad* が海賊の群れから姿を消したが、その *Conrad*こそ *Lara* の前身であり、そのときの *Gulnare* が、後の小姓 *Kaled* であり、彼女は男装して *Lara* に奉仕してきたことが作品の末尾に判明するという構成である。*Giaour* に於て、作者は次々に *narrator* を変えていって、ときには読者を混迷させ、理解に困難をきたさせ、それが読者の好奇心を刺戟するという結果を得さしめた。ところが *Lara* に於ては *narrator* 多用が避けられているし、テーマが単一なために分り易い。と言っても、この詩行が *Canto I, II* の全部で1272行あって、*Kaled* が女であると知らされるのは1159行目に至ってからである。やはり、バイロンは *suspense* を持たすのに相当の苦心を払っているわけである。

また、ここでは *Lara* が農民一揆の指導者として描かれている。ゲーテの *Berlichingen* と並んで、ロマンチズム時代において一揆を扱ったものとして、おそらくは最も早いものであり、これは亦、バイロンの *liberalism* を証すものである⁽²¹⁾。

The Siege of Corinth: Turkish tales の最後の作品。このヒーロも、高貴な無法者と心優しきヒーロの両方を備えている。ときは1715年、所はギリシャの町 *Corinth*。二万のトルコ軍が町を包囲し、あすは総攻撃を決行しようとする前夜に、陣営から出てさまよい歩く青年は *Alp* と

いう Venetian であった。彼はいま Corinth を占領している Venetians の首領 Minotti の娘 Francesca を恋したが、首領に拒まれてから流浪の身となって、キリスト教を棄ててイスラム教徒となり、トルコ軍に加わってその作戦指導をしている。それによって自分を追放した祖国の同胞に手痛い敗北を与えて彼らに復讐しようと誓っているのだった。青白い月が荒涼たる戦場を照らしている。野犬が戦死者の肉を裂き骨を砕いている。ふと見ると Francesca が蒼白な頬をして立っている。ひとりで町を出て、あなたに会いにきたのだと告げ、もし私を愛しているなら the Crescent (イスラム教) を棄てて、the Cross (キリスト教) に戻って、町の同胞を救ってくれまいかと説く。男は応ずるわけにいかぬ。ふたりは別れた。予定の如く総攻撃が翌日行われた。町に攻め入った Alp は、最後まで抵抗している Minotti を見て降参をすすめる。しかし、彼は青年にむかって娘は昨夜死んでしまったと答えて青年を罵る。すると、昨夜の彼女は亡霊であったのかと、心が宙に浮いた瞬間に、別の Venetian に狙撃されて死ぬ。トルコ兵が乱入し、首領は火薬庫に火を放って自決する。

注

- (1) Эпоха романтизма, изд-во «Наука». 1975, с. 6, 31
- (2) Там же, с. 8, 31
- (3) 同上には1811—34年に亘って西欧のロマン主義文学作品にしてロシアに紹介され翻訳された記事・翻訳を細大漏らさない形で列挙されている。T. Moore や J. F. Cooper の作品紹介が僅かに点在するだけで、残りはスコット作品が約90%を占めているのには驚きを禁じえない。
- (4) В. Г. Белинский, Сочинения Александра Пушкина, изд-во «Детская Литература», М., 1969, с. 193.
- (5) М. И. Гиллельсон, Молодой Пушкин и арзамасское братство, изд-во «Наука», Л. 1974, с. 117-8. П-Ш-К-И-Н はアルザマス会の第15回定例会 (17年9月) から正会員。
- (6) В. С. Баевский. Традиция «легкой комедии» в «Евгении Онегине». - В кн.: «Пушкин. Исследования и материалы. т. X», изд-во «Наука», Л. 1982, с. 117.
- (7) Там же, с. 117-118.

- (8) 草鹿外吉, 南方時代のプーシキンの詩(1)・日本福祉大学研究紀要, 1980年46号, p. 28
- (9) Paul G. Trueblood, Lord Byron, Twayne Publishers, New York, p. 59.
- (10) А. С. Пушкин. Полн. Собр. Соч. т.13 М. 1948, Изд. АН СССР, с.18.
- (11) А.С. Пушкин. Пол. Собр. Соч., т.8, М. 1948, Изд-во АН СССР, Путешествие в Арзрум во время похода 1829 года, с. 447
- (12) В. Н. Иванов, Александр Пушкин и его Бремя, М. «Молодая Гвардия», 1977, с.84,85 この夜に Элегия の生まれた背景を Иванов はそのように空想している。また, その翌日, 娘たちと別荘の海辺を散歩していたとき, Екатерина がバッグから葡萄の蔓を取り出すとき, 金色モロッコ革の美本を砂上に落とし, その本が Pilgrimage であるので, 彼女は詩人に To Inez の部分を読んで聞かせたことまでを想定している。
- (13) 日本でも Adieu! adieu! の別れの歌を好んだ人がある。森鷗外主宰・新声社のメンバーが泰西詩人を分担して, アンソロジー「於母影」を編んだとき, 落合直文が『チャイルド・ハロルドの巡歴』と題して邦訳をのせている。明治22年8月, 「国民の友」の付録として売られた。土井晚翠等, 多くの人が訳している。
- (14) 阿部知二, バイロン, 研究社英米文学評伝叢書 1937年 p. 25
- (15) English Romantic Poets, Modern Essays in Criticism, edited by M.H. Abrams, Oxford University Press, London, Oxford, New York. T.S. Eliot. *Byron*, p.198,199.
- (16) プーシキンはここを次のように試訳している——Из Байрона
 Нет ветра — синяя волна
 На прах Афин катится;
 Высокая могила зрится.
- グルズーフでニコライを先生としてプーシキンが原文を研究したことがある。プーシキン保持の紙には, そのニコライの露訳文も記入してある。
- (17) Byron, Childe Harold's Pilgrimage and Other Romantic Poems. Edited by John D. Jump. Dant & Sons, Limited, London, p. 229
- (18) Advertisement で, 作者は, 若い Venetian が彼女のために復讐をとげた, と手廻しよく紹介している。
- (19) Circassian は北コーカサスのチェルケス人。Leila は, トルコ人が北コーカサスを支配していた時に女奴隷として後宮に連れてこられた。
- (20) Peter L. Thorslev, *Types and Prototypes in the Byronic Hero*, Minneapolis, 1962
- (21) John D. Jump, *Byron*, Routledge Kegan Paul, London & Boston, p.72.

前島正安先生の玉稿を賜って

この3月をもって13年間にわたる本学のロシア語非常勤講師の任を退かれた前島正安先生の最近の大論文を、ロシア語教室が『教養論叢』へ掲載依頼した経緯について少し述べたい。教養部が非常勤講師の方の年齢制限をもうけたことによって先生の御協力を仰げるのもあと1年しかないと判明した時、わたしたちは、日頃の御研鑽にもかかわらず、厳格な自己批判精神のためなかなか成果を発表なさろうとしない先生から、なんとしても御研究の一端を公けにさせていただいて、ロシア文学研究不毛のこの中部地区に大きな足跡を残していただくことが、なしうる最大の饒であろうと考えた。さいわい昨年度のはじめ、日本ロシア文学会中部支部秋の研究発表会での口頭報告を約束していただき、一同大いに喜んだ。ところが長年の無理がたたったのであろう、直前になって先生は胃潰瘍を悪化させ、会場である福井大学へは入院を延期されておいでになった。こともなげに「帰ったら病院へ直行ですよ」とおっしゃった先生のお顔を見てわたしたちは、老齡を考慮しなかった自分たちの不明を恥じた。

発表には一時間以上をあてることができたが、それでも先生にとっては、序論にも足りないということが誰の目にも明らかだった。研究の内容は、バイロンとプーシキンの比較という、英文学にも明るい先生ならではの貴重なものであったが、時間という物理的制約のため、全体像をうかがい知ることができないのは実に残念であった。

その時点では手術さえすれば回復は早いであろうとの予想であったため、『論叢』4号の締切りまでゆっくり清書していただければ、なんとか掲載可能であろうと思われたので、わたしたちは先生に「お元気になり次第、ぼちぼち清書して、ぜひうちの『論叢』に発表して下さい」とお願いし、先生を福井駅へ送り出したのであった。ところが先生のお身体は手術が不可能なほど弱っておられ、レーザー光線による気長な治療をほどこすしかなかったのである。

先生はわたしたちに何度も電話をされ、清書の遅れていることを気にしておられた。全編を一度に発表することが無理と分って、前半部分だけを木村宛に届けられたのは、先生の非常勤講師としての任期が切れる直前であった。ところが、引用部分に不備があるとおっしゃって書き直しのため再びお持ち帰りになり、本年度第1号の締切日の前日になってやっと、八事の教養部センターに直接お届けになった。後で知ったのであるが、その前日から先生は一睡もせずに書き直しの清書をされ、終えて時計を見たら朝の5時だったそうである。

論叢委員の好意によって、この一連の事情を考慮の上、前島正安先生の玉稿が日の目を見ることになったのは、まことに喜ばしい限りである。先生への感謝の念はもちろんであるが、投稿の期限超過にあえて異をとえず、掲載を快く引受けて下さった論叢委員各位にも、心から謝意を表したい。

1983年4月12日。 (木村 崇)